

平成28年度 新発田市遺跡出土品展

郷土の遺跡と地域史研究者

— その足跡をたどって —

平成29年2月17日[金]～3月15日[水] / イクネスしばた 展示室

主催：新発田市教育委員会

開催にあたって

地域の歴史研究において中心的な役割を担うのが、郷土史家や地域史研究者と呼ばれる人々です。考古資料について見てみると、行政主体の発掘調査が盛んとなる昭和50年代以前、学界の先導役としてリードした人の多くが郷土史家・地域史研究者でした。

その大半は、本業を別に持つ在野のアマチュア研究者でした。多くの時間と労力を費やし、仕事の合間をぬって収集されたコレクションからは、郷土の歴史と向き合う強い姿勢と情熱が伝わってきます。

今回の展示では、大正から昭和にかけて新発田を中心に活躍した研究者4名にスポットを当てます。御本人や御家族から市へ寄贈・寄託されたコレクションと、著作物などを通し、その足跡を紹介します。(以下、文中での敬称は省略させていただきます。)

■ 江戸・明治期の地域史研究

古来より遺跡の出土品についての記録は散見されますが、江戸時代になるとその数が増加します。

江戸時代中頃には国学の発達と洋学の先取を背景に人々の間で知的好奇心が高まり、木内石亭の『雲根志』に代表される考古学的研究が萌芽します。越後でも、丸山元純の『越後名寄』(宝暦6年)や、文化9年発行の橘茂世(崑崙)の『北越奇談』等があげられます。新発田市関連では、会津藩士の田邨三省が記した『会津石譜』(享和2年)に、滝谷地内で石鏝が出土したと述べられています。

明治時代になると、欧米から近代的な学問体系が取り入れられます。遺跡を扱う考古学もその一つで、明治10年に考古学者のモースが行った大森貝塚(東京都)の発掘調査は象徴的な出来事です。

新潟県内に関する考古学としての最初の文献は明治19年ですが、北蒲原地域に限ってみると、明治22年に、著名な歴史地理学者である吉田東伍が「越後国北蒲原郡安田村ツベタ岡古代土器」を『東京人類学会雑誌』に投稿しています。

新発田市内に目を向けると、菅与吉(号：白茅)が、この段階から考古資料に着目しています。菅は

明治元年に蒲原郡菅谷村(現 新発田市)で生まれ、菅谷小学校教諭を経て、菅谷村助役や同じ菅谷出身である高橋光威の内閣書記官長(現在の内閣官房長官)秘書を勤めた人物です。職務の傍ら郷土の歴史研究を進め、『菅谷史』の執筆や新聞等への寄稿でその成果を発表しました。

考古学関係では、資料の収集に努めました。当時の文献には、明治27年に帝国大学(現 東京大学)へ石器を寄贈したことや、明治33年に大野延太郎(東京帝国大学)が菅を訪問し、資料調査を行ったことが記されています。



菅与吉が収集した縄文土器(個人蔵)

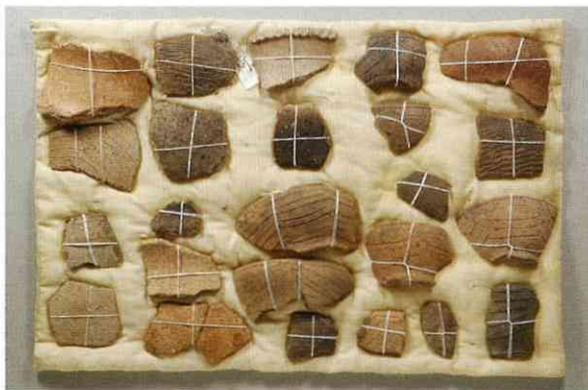
■ 大木 金平(おおき きんぺい)1875-1952

大木金平は、明治8年に新発田本村(現 新発田市)で生まれました。小学校卒業後に上京し、苦学の結果、教員資格を取得し小学校に勤めました。明治32年に紫雲寺尋常高等小学校の教師、明治41年には米子尋常小学校の校長となり、昭和2年の退職までその任を果たしました。

明治41年、地元の歴史・地理をまとめた帳簿を各学校に設置することとなり、これをきっかけに紫雲寺地区の歴史研究を始めます。10年以上にわたって集落の成り立ちや新田開発の研究に取り組み、大正10年に『郷土史概論』を発行しました。800ページを超える大著は、高く評価され、国民教育奨励会の審査で全国一位に表彰されています。

この本は、各種文献を中心としつつ伝承も含めて検討し、さらに地質学など当時の最新成果も取り込んだもので、北蒲原地域の総合的な研究の端緒と言えます。考古学的な部分では、遺物の情報収集とともに、大正9年に東京帝国大学の鳥居龍蔵を招き、遺跡に案内して受けた指導を反映させました。

教員退職後は、考古学研究に力を注ぎ、特に山草荷遺跡の調査・研究は特筆されます。昭和10年に東京帝国大学の講師であった八幡一郎を招き、収集した考古資料の指導を仰ぎました。翌年には自ら発掘した山草荷遺跡出土の弥生土器について手紙で教示を求めています。当時、新潟の弥生土器は資料が稀少で、不明な点が多かったこともあり、この資料の持つ意義はとても大きなものでした。内容が学界誌に発表されると、八幡をはじめ、藤森栄一・小林行雄・杉原荘介ら新進気鋭の弥生時代研



大木金平が調査した山草荷遺跡の弥生土器

究者が大木を訪ねました。昭和14年に、汎全国的な考古学組織である中部考古学会の大会が新潟で行われると、最終日には大木の案内のもと、山草荷遺跡で見学・調査が行われました。

また、昭和12年には『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告第七輯』が発行され、新潟県内の縄文時代遺跡の集成がなされました。この集成作業にあたって、大木は北蒲原郡域の資料を多数提供しており、地域史研究における中心的な存在だったことを物語っています。

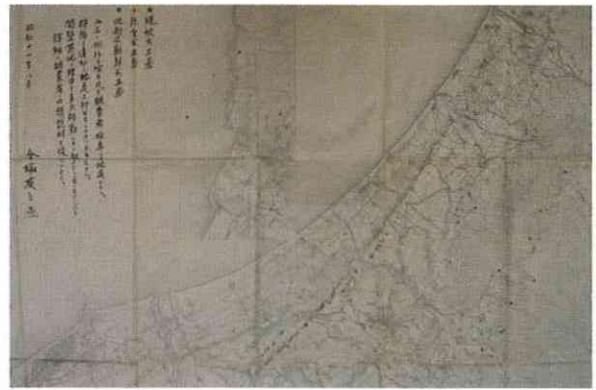
■ 金塚友之丞(きんづか ともじょう)1890-1971

金塚友之丞は、明治23年刈羽郡長島村(現 柏崎市東長島)の生まれです。独学で教員資格を得て中越地方の小学校に勤務しました。大正14年には中学教諭の検定に合格して柏崎中学校(現 柏崎高校)に移り、後に地理科の免許状も取得しました。

昭和7年末に新発田中学校(現 新発田高校)へ異動し、昭和14年末まで勤務しました。新発田中学では、同僚の新井寛励との議論、生徒との共同調査、多くの遺跡踏査に論文執筆と充実した活動があり、金塚にとり研究上の発展期と言えます。

遺跡調査のきっかけは、蒲原平野の低地帯の成因と変遷に対する、従來說への疑問でした。

従來說は、大木の『郷土史概論』に代表される、①石器時代の海岸線は現在の海拔15m地点、②貞観5年の地震による隆起と、河川の土砂堆積で陸化が進行、③寛治6年、大風雨で「越後津波」が発生し入江が閉じて湖となり、現在のような海岸線になった、というものです。そして、この説の根底にあっ



金塚友之丞作成の遺跡地図(新発田市立中央図書館蔵)

たのが、平安時代の年号をもつ「康平図」と「寛治図」という古図でした。この説に対し、地理教師の金塚は疑問を抱きます。従來說がかつて海底だったと説く低地帯から遺跡を見つければ、その反証になると考え、遺物の有無を探查し、その場所がいつごろに生活し得る状態だったのかを調べました。

調査は、自身が徒歩や自転車で踏査したほか、生徒からも情報を集めました。さらに、金塚の研究姿勢に共感した畠山佑二(小学校教員・地域史研究者)らの協力も得て精力的に行いました。その結果、低地帯でも多くの遺跡を見つけ、これを根拠に、古図が実際の地形を表したのではなく後世の作と判じ、古図に基づく大木説に異論を唱えました。

金塚が調査結果を昭和11年にまとめた地図が、新発田市立図書館に残っています。新発田市史編さん委員を務めた鬼木包次郎によると、今回展示の採集遺物は、もともと地図と一体だったようです。

当時、このような遺跡地図はなく、文献に記された遺跡を訪ねても場所が分からず困った、と金塚は述懐しています。この地図は、自説を示すのに加え、体験を踏まえて他者に対して遺跡の場所を明示したもの、とも言えるでしょう。また、地図に「凡テ調査者ノ採集シタ地点デアル」と付記しており、資料の取り扱いに厳密だった姿勢が窺えます。

この2人の相違点は論争に発展し、古図の真偽が争点となったことから「康平図・寛治図真贋論争」と呼ばれます。論争は、『高志路』誌上で数度にわたる投稿ののち終息しました。明確な結論に達しませんが、その後の学界の動向をみると金塚説が多くの支持を集めたと言えます。この古図は近年研

究が進み、江戸後期の創作とする見方が強まる一方、東日本大震災後、古図が災害時の浸水域を示す可能性を指摘する意見もみられ、災害の影響を重視した大木の視点も再評価されつつあります。

金塚は、新発田中学を去ると北越商業学校(現北越高校)に勤めました。拠点を新潟に移すと、労働環境などの変化で急速に失われていく習俗を記録することこそ喫緊の課題と捉え、蒲原平野低湿地帯の農村生活を記録しています。それまでと同様に実地主義を貫き、観察と記録を長年続け、成果は著書『蒲原の民俗』などに結実しています。

■ 田中 正治(たなか しょうじ)1912-1999

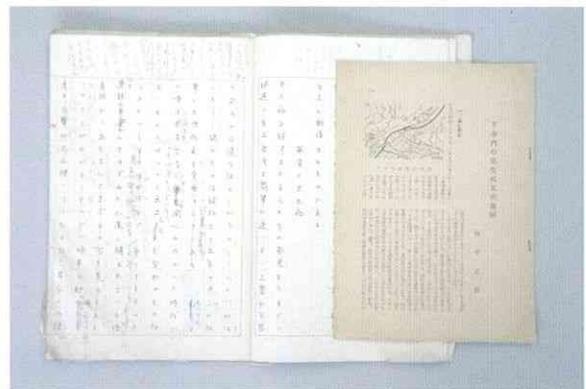
田中正治は、明治45年に新発田市佐々木で生まれました。昭和16年に新潟県農会(農業団体)に勤め、戦後は農林省に勤務し、新潟統計事務所等に籍を置きました。

郷土の歴史に対して強い関心を持ち、昭和30年前後になると、職務の傍ら古代遺跡を探究し始めました。特に地元佐々木地区にある馬見坂遺跡について資料の収集と研究を丹念に行い、昭和36年に『我が郷土の曙 佐々木厩坂遺跡を語る』を執筆し自費で発行しています。

昭和30年代は、全国的にも地域史研究が注目され、各地で市町村史の編さんが進みました。新発田市でも昭和36年に市史編さん委員会が発足し、基礎資料の収集が図られることになりました。田中は当初から編さん委員会調査員を委嘱され、考古および近世・近現代・民俗の各部会で活躍しました。考古部会においては、市内遺跡の分布状況や出土品



金塚友之丞採取の土器・石器



田中正治の村尻遺跡の報告と自筆原稿

所有者の情報などを調べています。昭和38年に公表された新発田市内の遺跡と遺物一覧表は、田中の力によるところが大だったと言えるでしょう。

また、昭和36年に下寺内地区の村尻遺跡で土器が出土したとの報せを受け、現地に赴きました。良好な状態で土器が残されており、重要な遺跡になると判断するとともに、このまま風化・損壊していくことを懸念し、翌37年に緊急的な調査を行っています。この調査成果は、市内で希少な弥生遺跡の存在として『新発田郷土誌』に報告されました。また、出土品は後に本人から市へ寄贈されています。

村尻遺跡は、昭和56年に新発田市教育委員会が発掘調査し、弥生土器の壺や全国的にも類例のない土偶形容器(国指定重要文化財)が出土しました。まさに、田中の報告が後の大発見へと結びついたのでした。

■佐藤義利(さとうよしとし) 1927-2000

佐藤義利は、昭和2年に豊浦村天王(現 新発田市)で生まれ、雑貨商を営みました。昭和35年前後に古銭の収集を始め、その貨幣が使われた時代を調べるうちに遺跡への関心を膨らませました。自宅近隣の曾根遺跡や、乙次地内のニツ山で遺物を採集し、県の文化財担当を訪ねて資料の価値を知ると、より多くの遺跡踏査を行いました。

県へ持参した資料に製鉄の痕跡を示す遺物があり、その存在を聴きつけた天田昭次(誠一、人間国宝の刀匠)が佐藤を訪ねます。天田は当時、古代製鉄の復元を試みていました。意気投合した2人は行動を共にし、天田から製鉄に関する知識を得る一



佐藤義利が採集した岡屋敷窯跡の須恵器

方、天田の製鉄復元を支えました。製鉄跡を求めて山中に遺跡を探し、昭和35年に天田の発見した金堀製鉄遺跡を実測調査しています。その記録を学術雑誌で報告しましたが、この小文は、製鉄遺跡に関する県内初の考古学的調査報告と言えます。

また、昭和45年に『北蒲原郡内の製鉄址の一考察』で、遺跡分布や地形観察、文献読解など、総合的に製鉄遺跡を検討しました。併せて中野壹任・大沼淳が製鉄遺跡を中世修験者と結び付ける解釈に疑問を表明し、物的証拠の少ない製鉄遺跡の年代決定とそれに基づく歴史観に対し、慎重な姿勢を求めています。

古代製鉄の復元に挑む天田の工房には多くの製鉄研究者が訪れました。佐藤も同席する中で理化学的な研究手法や全国的な動向に触れ、見知を広げました。そんな中、昭和48年に真木山製鉄遺跡群がゴルフ場開発に伴い豊浦町教育委員会により発掘調査されました。当時、開発に先立つ調査事例はまだ少なく、特に製鉄遺跡の調査は全国的にも稀でした。この調査が実現した背景には、当地の製鉄遺跡の存在を明らかにし、かつ文化財パトロール員として遺跡保護に努めた佐藤の、郷土への強い思いと地道な姿勢を忘れることはできません。

昭和30年代半ばに新潟県遺跡調査員、昭和40年代後半には県文化財パトロール員、昭和50年代には豊浦町史協力委員を務められ、文化財保護と地域史研究の発展に尽くされました。

今回の展示に際して、以下の個人・機関より御理解・御支援を賜りました。記して感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

大木尚樹、大木敦子、金塚尚、木村恬文、小林隆幸、佐藤律子、菅与四兵衛家、関雅之、曾部珠世、竹田和夫、田中正、鶴巻康志、宮崎芳春、新潟県立新発田高等学校同窓会、新潟市歴史博物館、新潟市北区郷土博物館、新発田市立中央図書館

平成28年度 新発田市遺跡出土品展

郷土の遺跡と地域史研究者

— その足跡をたどって —

展示解説資料

編集・発行：新発田市教育委員会 文化行政課